

亀山郁夫著 青土社

『あまりにロシア的な。』

巷では、朝、喫茶店でコーヒーを頼めばついてくる手軽でお得な朝食セットになぞらえて、どこにでもいる女の子たちの集団を「モーニング娘。」と名づけて一躍アイドルに仕立て上げた浪花のミュージシャンが、そのコラーージュの手腕を買われて『LOVE論』なるエッセイ集をつくり、またたく間にベストセラーの仲間入りを果たしてみせた。へコンプレックスを逆手に

という直截な、あざとさのかけらすらもない仕掛けだけで、あつてなく多数の読者を獲得してしまう事態を嗤ってすまざるわけにはいかないほど、ぼくらは取り巻く出版状況が深刻であるとするならば、およそ端からへ売れるへ見込みのない書物の、せめて表題にだけでも、アイドル集団にあやかっ、さりげなく「」ひとつ紛れ込ませることで、コラーージュの出来栄を誇示しようと若い編集者が目論んだとしても、それを責めることはできないだろう。ましてや、その書物は、あの『甦えるフレイブニコフ』によって、いまから十余年前、ぼくら外国文学研究者に途轍もない衝撃をあたえたロシア文学者の手になる初のエッセイ集なのだから、それを一人でも多くの読者のもとに届けたいと願う編

集者が、およそ二十四万字に込められた著者の思いをしつかり受け止め、作品にたいする批評を茶目つきに繰るんで表題に盛り込んだのだとすれば、もしかしたら表題の末尾に添えられた「」こそが、『あまりにロシア的な。』と題された書物の核心をあらわしているときえいえるのかもしれない。

一九九四年から翌春にかけての、著者はじめての長期にわたるロシア体験を、四年という歳月を経たへいまに立つて、当時の日誌や書簡、新聞記事などのコラーージュによって再編成したという欲望が産んだ書物——そう括つてしまえるのなら、この書物は、旺盛な執筆活動の合間にひとりの外国文学者がつづった余滴のようなものとして片付けることもできるだろう。けれど敢えてコラーージュという手法を探ることではなく実現し得なかったへ記憶への旅へが亀山郁夫を駆り立てている欲望の正体であるのだとすれば、その時代錯誤とも映りかねないコラーージュという手法も、紋切り型といわれても仕方のない直喩や提喩も、にわかに別の意味を帯びてくる。

それは、亀山郁夫がかかえている混沌としたへいまへが発したへ悲鳴へのようなものだ。記憶への逆行が不可避免的に逢着するへ混沌へ」のあらわれと言つてもいいかもしれない。

言うまでもなく、亀山郁夫の最良の資質は、フレイブニコフからマヤコフスキーにいたるまで、へ評伝へというかたちを採るとき最大に發揮される。対象の微細な壁にまでとどく批評的なまなざしは、つねに対象との一体化という、批評にとつての逆説的なプロセスに支えられている。だからこそ、これまで亀山郁夫の仕事を羨望にも似た驚嘆とともに追つてきたのかもしれない。

この意味で、『あまりにロシア的な。』という書物は、へ作者へ亀山郁夫がへ登場人物へ亀山郁夫との一体化を躊躇いながら閉じてしまつたへ物語へということもできる。もちろんへ記録へとへ記憶へのはざままで翻弄される亀山郁夫をへ読むへという体験は充分すぎるほど魅力的なのだが、このへ物語への背後に流れる四年という歳月のあいだに亀山郁夫がぼくらにとどけてくれた評伝や翻訳には、少なくともすぐれたへ書き手としての亀山郁夫だけがいることをぼくらは知っている。

(和田忠彦)